

「実感」の系譜

高 田 瑞 穂

「実感」ということばが、特に「白樺」派によって重視され、したがって「白樺」派の文学の本質を規定していったことは、周知のことに属する。しかし、「白樺」派に自明な属性として考えられた「実感」は、言うまでもなく一つの概念である。そして、自らが概念化することをあくまで拒否しようとするところに成立するものが、ほかならぬ「実感」であった。そうだとすると、対象的・概念的に「実感」を把握しようとすることは、意図そのもののうちに矛盾をはらんでいる。「暗闇を知らうとして蠟燭を點す」の愚を敢えてすることなしには、「実感」を認め、「実感」を論ずることは不可能であろう。もし、その愚を敢えてしようとする場合は、少くとも如上の矛盾の所在を知り、せめてはそれの統合の可能性について納得するところがなければならないであろう。たとえば、可能性への可能性であっても。思うに、文学の科学の困難、それにもかかわらず文学の科学の必要——この矛盾の

統合の問題も、本質的には変るところがないであろう。「実感」の系譜を見ようとする今、私は作者の実感に対して読者の実感を置き、その落差の究極的排除の可能性を信じるほかはない。そして、そのための媒介者こそ作品であるであろう。何故なら、作家にとっても作品は、「実感」そのものではないのだから。しかし、こういう私の、言わば可能性の可能性への執着にも、手厳しい反論がないわけではない。例えば私は、二葉亭によって次のように批判されるであろう。それは明治四十一年、私の生前において下された批判である。

人生、^{ライフ}々々といふが、人生た一体何だ。一個の^{ノイション}想念ぢやないか。今の文学者連中に聞きたいのは、よく人生に触れなきや不可^{いかん}と云ふ、其人生だ。作物を読んで、こりや何となく身に浸みるとか、こりや何となく急所に当らぬとかの区別はある。併しそれが直ちに人生に触れる触れぬの標準

となるんなら、大麥輕率のわけぢやないか。引緊つた感を起させる、起させぬの別と、人生に触れる触れぬとの間にや、大なるギャップが有りやせんか。私はどうもそんな気がするね。

明治四十一年は、二葉亭の死の前年に当る。二葉亭はこの年六月、朝日新聞露西亜特派員として新橋駅を出発したが、翌四十二年二月、肺結核の診断を受け、高熱に苦しみ、四月にペテルブルグを去って帰国の途につき、ロンドンで乗りかえた日本郵船賀茂丸がベンガル湾洋上にさしかかった五月十日、ついに船中に没したのであった。四十五歳の若さであった。そうすると、四十一年は、二葉亭にとって、最後に、決定的に文学と訣別した時に相当する。この年二月、「太陽」誌上に「文壇を警醒す」を掲げ、「文章世界」に「私は懷疑派だ」を発表し、三月「平凡」を刊行し、訪露直前の六月、再び「文章世界」に「予が半生の懺悔」を載せた二葉亭の胸中に在ったものは、自然主義文壇に対する強い反撥と、今から始まろうとする自らの後半世に寄せる新しい期待とであったにちがいない。しかし、二葉亭には後半の生は与えられなかったのである。

右に引いたものは、「私は懷疑派だ」の末尾に近い一節である。文体からも明らかなように、これは口述筆記である。「余が半生の懺悔」もそうである。右の引用だけから、その「懷疑」の全貌を、ひいてはその自然主義批判の全体を知る

ことは、もとより不可能である。しかし、二葉亭における「懷疑」の核心は、たしかにここに見られてよいのである。そこでは二葉亭は、「作物を読んで、こりや何となく身に浸

みるとか、こりや何となく急所に当らぬとかの區別」を「直ちに人生に触れる触れぬの標準」とすることの「輕率」を責めている。作者の実感と読者の実感との究極的融和を考えようとする私にとつても、この二葉亭の「懷疑」は鋭く突きささってくる思いを禁ずることができない。もし私が、読むことと行為することを「輕率」に重ね合わせていたとしたら、この批判は私にとつて、致命的でなくてはならない。事実、読むことは直ちに行為することではないのだから。読むことを直ちに行為することと安易に重ね合わせるものの行方が、ついに一の空白であり、混冥であるにちがいないことは、多くの疑いの余地はない。「本から現実へ」を終生の態度とし、その態度への執着においてあれほど真剣であった芥川のついの行方を想起するがよい。私は今、そう考えるほかはないために、一の究極的調和にすがっているのである。私にとつてそれは、不可欠の要請であるにすぎない。それでも二葉亭は、恐らく、納得を示さないであろう。しかし、そういう二葉亭が、「引緊つた感を起させる、起させぬの別と、人生に触れる触れぬとの間にや、大なるギャップが有りやせんか。」と言ひ始める時、二葉亭の「懷疑」が主として、「引緊つた感を起させる」とことと「人生に触れる」とこととの落差にかかわるものであることが明らかとなる。二葉亭の主たる関心

は、作家の創作活動そのものに向けられる。どんなに「引緊った感を起させる」ことに成功したとしても、それをもつて直ちに「人生に触れる」ことに成功したと考えることに、二葉亭は根本的な「懷疑」を持っていたと考えていいであろう。問題は、読者の場合ではなく、かかって作者の場合であった。だから二葉亭は、特に「今の文学者連中に聞きたい」と言う。君たちは口を開けば「人生に触れなきや不可」という。しかし、「人生たあ一体何だ。一個の想念ぢやないか。」二葉亭が、作家たる自己に満足し得なかったこと、作家たる自己に訣別しなければならなかった理由を、われわれはここに見出していいであろう。「引緊った感」「触れる」を「実感」と言いかえれば、二葉亭の主張は、要するに、創作活動に「実感」なし、作品に「実感」なし、ということだった。

例えば此間盜賊に白刃を持つて追掛けられて怖かつたと云ふ時にや、其人は眞実(ほんとう)に怖くはないのだ。怖いのは眞実に追掛けられてゐる最中なので、追想して話す時にや既に怖さは余程失せてゐる。こりや誰でもさうなきやならんやうに思ふ。私も同じ事で、直接の実感でなけりや眞剣になるわけには行かん。ところで小説を書いたり何かする時にや、この直接の実感といふ奴が起つて来ない。

これも「私は懷疑派だ」の冒頭に近い一節である。語られた「実感」を信じ得なかった二葉亭は、ついに自ら作家たる

ことを止めなければならなかった。理の当然であつた。全盛期にあつた自然派の人々の一切の営みは、たとえそれがどのような「実感」的であり、どのように「眞剣」らしくあらうとも、所詮は二義的なもの、影、にせものである。二葉亭にはそう映つた。こういう二葉亭の文学観は、究極において、明治期を貫流する実学尊重の氣運につらなるものであつたかも知れない。「詩を作るより田を作れ」——二葉亭は、文学を捨てて「直接の実感」に触れようとした。そして、そういう道行きにおいて、二葉亭に始めにあり、終りにあつたものは、むしろ「直接の実感」への情熱であつた。文学との結びつきは、その全体がむしろ迂路であつた。少くとも「予の半生の懺悔」の物語るところによればそうである。その始めの方と、結末とから、それぞれ短い引用をしておこう。

……私がずつと子供の時分からもつてゐた思想の傾向——維新の志士肌ともいふべき傾向が、頭を擡げ出して来て、即ち、慷慨愛國といふやうな与論と、私のそんな思想とがぶつかり合つて、其の結果、将来日本の深憂大患となるのはロシアに極つてゐる。こいつ今の間にどうにか禦(よ)いで置かなきやいかんわい——それにはロシア語が一番に必要だ。と、まあ、こんな考からして外国語学校の露語科に入学することとなつた。

明治三十六年の七月、日露戦争が始まると云ふので私は

日本に帰つて、今の朝日新聞社に入社した。そして奉公として「其面影」や「平凡」などを書いて、大分また文壇に追付いては来たが、さりとて文学者に成り済ました気ではない。矢張り例の大活動、大奮闘の野心はある——今でもある。

それが「奉公」であつたにしても、「其面影」や「平凡」のうちにも、「実感」への情熱が、何らかの形で流れていたにちがいないことは、言うまでもないであろう。四十年の「平凡」が、「近頃は自然主義とか云つて、何でも作者の経験した愚にも附かぬ事を、聊かも技巧を加へず、有の儘に、だらだらと、牛の涎よだのように書くのが流行るそうだ。好い事が流行る。私は矢張り其で行く。で、題は『平凡』、書方は牛の涎。」というようなことをばを初めに掲げているとしても、それは反自然主義的心情の生んだ皮肉にすぎない。「実感」は随所に題現し、それこそがこの作品を生動せしめた。そうである以上、未だ創作に対する「懷疑」が明確になる以前における創作、「文学熱のみ独り熾ん」（「余が半生の懺悔」）であつた時の作品「浮雲」が、ひたすらに「真剣」に書き続けられていったにちがいないという推定は自然であろう。そのことの正しさは、何よりも「浮雲」そのものが、今に、われわれに語り続けているところである。つまり「浮雲」は、「実感」による小説であり、「実感」に基づく文学の最初のものであつたと考えていいのである。わが近代文学は、この

「浮雲」によつて、明確な一步を踏み出したのであつた。そして、誰も知る通り、この作品は未完に終つた。どうして未完のままに筆を断つたかは、「我が半生の懺悔」にほぼ明らかである。

将来は知らず、当時の自分が文壇に立つなどとは僭越至極、芸術を辱しむる所以である。正直の理想にも叶つて居らん……と思ふものゝ、また一方では、同じく「正直」から出立して、親の脇わきを嚙かつてゐるのは不可、となる。すると勢ひ金が欲しくなる。欲しくなると小説でも書かなければならんが、そいつは芸術に對して済まない。……之は甚い進退維谷だ。……どうも自分ながら情ない、愛想の尽きた下らない人間だと熟々じつじつ自覚する。そこで自ら放つた声、くたばつて仕舞へ（二葉亭四迷）ノ

ここに「正直の理想」とは、二葉亭にとつて「道德的の中心觀念」であり、それは、露文学と儒教によつて二葉亭の内に自然に形成されたものであつた。だからそれは單なる觀念である以上に、その態度でもあつた。そしてそれはまた同時に、まぎれもなく「真実の実感」を目ざす「維新の志士肌」ともいへべき傾向）だったのである。「浮雲」に軽跳の風のほとんど見受けられなかったのも、当然であつた。だから、主人公内海文三は、まことに真面目であつた。その真面目さが下級官吏たる彼を次第に官僚機構から締め出してゆく。社

会的に不合理は、もともと一個人の「正直」によつてどうなるものでもない。文三のお勢に寄せる恋にしても同じである。輕薄な娘お勢に、もっぱら真面目に恋するとは愚である。

「人ぢやアないの、アノ真理」などという輕薄そのもののお勢のことに、^{あらまよ}「慄然と胸震をして」「アア貴嬢は清淨なものだ、潔白なものだ……親より大切なものは真理……アア潔白なものだ」という文三の姿は、むしろ読者をして「喟然として嘆息」せしめずにはいないであらう。ついに官を免ぜられ、お勢にうとんじられた文三は、次第に自分をその内面から崩壊させてゆく。

始終お勢の事を心配してゐるうちに、何時からともなく注意が散つて一事には集らぬやうになり、おり／＼互に何の關係をも持たぬ零々碎々の事を取締もなく思ふ事も有つた。曾つて両手を頭に敷き仰向けに臥しながら天井を凝視めて初は例の如くお勢の事を彼此と思つてゐたが、その中ふと天井の木目が眼に入つて突然妙な事を思つた。「かう見たところは水の流れた痕のやうだな。」かう思ふと同時に、お勢の事は全く忘れて仕舞つた。そして尚ほ熱々とその木目に視入つて、「心の取り方に依つては高低が有るやうにも見えるな。ふん『おぶちかる、いろりゆうじよん』か。」

最後の章に見る文三の姿である。そしてこれは、同時に、

「浮雲」執筆に苦しみつつある二葉亭その人の貌でもあつた。手記「落葉のはきよせ」の次の一節と比較して、そうである。そういう形で「実感」は導入された。

「かほどまで拙しとは思はざりしが、印刷して見れば、殆ど読むに堪へぬまでなり」と心のうちに思へり。読み終りても、心落ちるず、ちぎれ／＼の独語をわれにもなく言ひつゝ、間断なく躍るやうに部屋の内を歩みめぐり、つひに堪へかねて、両手にわが頭に〇りつけり。されど我れに返りて思へば、かゝることに精神を悩乱するは甚だ拙しと恥かしくなりしほどに、ふとまた雑誌を受取らざる前、氣結ばれて心地死ぬべくおぼえし時、遙かの空を見上げたるに、やゝ心のどやかになりたるを憶ひいだし、と同時にわが顔はおのづから挙りて、眼は蒼空に注げり。此時、蒼空は余のための唯一の解毒藥の如くに思はれしなり。

しかし、作中の文三は、必ずしも二葉亭その人ではない。言うまでもないことである。文三は、どうしようもない生の沈滞の底に墮しつゝ、次第に精神の錯乱を生じようとする。

「おぶちかる、いろりゆうじよん」は、その先ぶれであつたにちがいない。しかし、二葉亭はちがう。二葉亭は、文学との絶縁によつて、「真実の実感」の行爲的享受に向かう。「浮雲」の筆を折つて、二葉亭が内閣官報局雇員となつたのは、明治二十二年八月、二十五歳の時であつた。

二葉亭晩年の胸中に在った自然主義批判については、先にふれたが、わが自然派の人々における「牛の涎」は、次第にその震幅を縮め、梗塞された身辺に視野を限定して行かなければならなかった。その経路については、改めて言う必要を認めない。二葉亭の指摘した根本的矛盾もそこに働いたにちがいないが、それに加えて、数々の歴史的・社会的現象も禍したことはたしかである。そして、明治四十二、三年を契機として、いわゆる反自然主義文学は一斉に抬頭したけれども文壇は実質的には、鷗外・漱石の時代であった。鷗外は耽美派を、漱石は白樺派をそれぞれそのふところに温めつつ、

文壇に新しい氣運を醸成していった。そういう過度の時ににおいて、二葉亭の「実感」を継承したものは、ほかならぬ漱石その人であった。元治元年生れの二葉亭にくらべると、慶応三年生れの漱石は三歳の年少であったが、その文壇登場の時期においては、二十年に近いちがいがあった。そういう二葉亭の死に際して、漱石は「感じのいい人」という談話を「新小説」(四二・六)に掲げた。そこで漱石は、「私は唯同じ朝日新聞社に居たという丈で、殆ど親交がなかった」ことを言い、「訪ねて往って、大に語ろうと思つて居た事」そのことは果されなかったが、「一寸とした話をしたばかりでも、感じのいい、立派な紳士で、誠に上品な人と思われた」と記している。その前年の談話「露国に赴かれたる長谷川二葉亭氏」(「趣味」四一・七)においても、「会つて心持のよい方」と語っている。そんなことよりも、漱石が、明治三十

九年十月、三重吉宛の書簡に、次のようなことを書き記していることの方が大事である。人のよく知る一文であるが、次に引こう。

僕は一面に於て俳諧的文学に入ると同時に、一面に於て死ぬか生きるか、命のやりとりをする様な維新の志士の如き烈しい精神で文学をやつて見たい。それでないと何だか難をすてゝ易につき劇を厭ふて閑に走る所謂腰拔文学者の様な氣がしてならん。

先に私は、「予が半生の懺悔」の一節を引いたが、その中にたしかに記されていたことは、「維新の志士肌ともいふべき傾向」の自覚であつた。漱石の二葉亭に寄せる親和の情の奥に、私は二人に共通する「維新の志士」に寄せる景仰を見て誤りではあるまいと思う。むろんそれは、どちらのどちらへの影響というが如きものではなかつたであらう。二葉亭と漱石との間には、直接に何一つ交渉はなかつたにちがいない。それにもかかわらず、二人の胸奥には、明治人としての共通の「志士肌」な一面があつたことは否定できない事実だつたと思う。国家のためにロシア語を学んだ二葉亭であり、乞われれば「法学協会雜誌」というが如き場違いの雑誌のためにも「明治天皇奉悼之辞」を書いた漱石であつた。二葉亭が「浮雲」において描こうとしたものが、究極において明治日本の文明批判であり、そのことに自ら満たされずして文壇

を去ったことについては、先にもその一端にふれておいた。

漱石の文学が、自我の確立と「現代日本の開化」(四四・八)批判とを結び合わせたところに一貫した主題を持つていることは、改めて言う必要もあるまい。もし、そういう共通の地盤に立ちつつ、二人をへだてる一番大きなものを挙げるとしたら、それは文学に寄せる信頼の度合いだったにちがいない。二葉亭は、それが「実感」の影にしかすぎないが故に、文学から実行の世界に身を転じた。同じく「実感」によって創作に従った漱石は、その生涯を作家として貫いた。「命のやりとりをする様な維新の志士の如き激しい精神」とは、二葉亭の「直接の実感」と変るところはない以上、漱石の意図した文学を、「実感」の文学と考えることに支障はあるまい。それなら、何故漱石は、二葉亭の如く実行の世界に去らずにすんだのだったか。明らかに、二葉亭を意識しての談話「文学は男子一生の事業とするに足らざる乎」(「新潮」四一・一一)において漱石は言う。

自分の文芸に対する考へに基づいて文芸と云ふ其職業を判断して見ると、世間に存在して居る如何なる立派なる職業を持つて来て比較して見ても、それに劣るとは言へない。優るとは言へないかも知れないが、劣るとは言へない。

系譜とは、必ずしも意識的な継承の積み重ねであるとは限

らない。そして、継承とは、常に何らかの意味において否定的継承である。だから、漱石にとって、二葉亭が無縁に近い人であったとしても、また、その対文学態度に如上の相違があろうとも、それはそれで、二人がともに「実感」に立って創ったという事実を言うためのさまたげではない。むしろ、次のような相似をこそ私は重視する。

「浮雲」の文三は、その真面目さの故に、不真面目な現実から脱落して行かなければならなかった。漱石の場合も、しばしばそうであった。例えば「野分」(四〇)の主人公白井道也を見よ。「諸君は覚悟をせねばならぬ。勤王の志士以上の覚悟をせねばならぬ。斃る覚悟をせねばならぬ。」と叫ぶ道也のうちに、われわれは明瞭に、三重吉宛書簡に示された漱石その人の心を見ることができようであらう。しかし、私はここに、「行人」(大正一)の主人公を考えたい。一郎は妻お直に對する不信を契機として、「死ぬか、気が違ふか、夫でなければ宗教に入るか。僕の前には此三つのものしかない」という、ぎりぎりの所まで自分を押し詰めていった。そこまで自分を追尋せねば気のすまない真面目さと、鋭い自意識と、学者としての悟性と、それらが一郎を窮地に導いたのである。それは、文三の陥った混冥と本質的に変りはない。そして文三は、「天井の木目」にやるせない視線を送り、「おぶちかる・いるりゆうじょん」に、一瞬の救いを得た。一郎は危機の関頭に立つてどこへ行ったか。彼は旅に出た、「絶対の境地」を求めて。しかし、それは想像することは出来て

も、到達することは出来ない境地であつた。それなら一郎は本当に狂死しなければならなかつたか。そうでもない。一条のか細い光は、たしかに一郎の面貌にさした。そこで漱石は筆を置いた。

薄の根には蟹が這つてゐました。小さな蟹でした。親指の爪位の大きさしかありません。それが一匹ではないのです。しばらく見てゐるうちに、一匹が二匹になり、二匹が三匹になるのです、仕舞には彼処にも蒼蠅い程眼に着き出します。

「薄の葉を渡る奴があるよ」

兄さんは斯んな觀察をして、まだ動かずに立つてゐます。私は兄さんを其処へ残して故の席へ歸りました。

兄さんが斯ういふ些細な事に氣を取られて、殆んど我を忘れるのを見る私は、甚だ愉快です。是でこそ兄さんを旅行に連れ出した甲斐があると思ふ位です。其晩私は其意味を兄さんに話しました。

「先刻君は蟹を所有してゐたぢやないか」

蟹を所有することは、蟹に所有されることである。完全に所有された時、自分と対象とは一体となる。相対が絶対に変る瞬間がそこにある。Hさんの報告による限り、兄さんすなわち一郎の論理は常にその逆を欲した。「まず絶対を意識して、それから其絶対が相対に變る刹那を捕えて、そこに二つ

の統一を見出」そうとして苦しむのが一郎であつた。

「それより逆を行つた方が便利ぢやないか」

「逆とは」

斯う聞き返す兄さんの眼には誠が輝いてゐました。

「つまり蟹に見惚れて、自分を忘れるのさ。自分と対象とがびたりと合へば、君の云ふ通りになるぢやないか」

「左右かな」

兄さんは心元なさうな返事をしました。

一郎の返事が心元ないものであつたとしても、その時、一郎の目に「誠が輝いてゐる」たことは事実だつた。そこに一郎の可能性の糸を見ることは誤りではないであらう。そしてそれは、一郎の救いの糸たるに止まらない。漱石その人の心にとつてもそうであつた。だからこそ漱石の文学は、「実感」の文学であつ。晩年の漱石の生にとつて、目指され、求められたものは、常に自他合一の瞬間の実現であつた。一匹の蟹を所有することによつて、所有される忘我の時を求めて——その方向を端的に示したものが、「即天去私」の文字であつた。だから「即天去私」とは、漱石にとつて、一の祈りであつたであらう。その実現はもともと「心元ない」。しかしそれを凝視する漱石の目には、たしかに「誠が輝いて」いたにちがいない。

「白樺」派の文学が、漱石を継承し、漱石に励まされて文壇に登場した事情については、すでに私は色々な場所に記してきた。今は「白樺」創刊号に武者小路の『それから』に就て」のあることを言うに止めたい。しかし、「実感」の系譜を考へる場合、どうしても省略し得ないことは、二葉亭・漱石に共通した「実感」が、特に志賀直哉に継承されていた事情である。

「白樺」派に基本的な態度が、「実感尊重」であったことは、冒頭に言った。そこから、「白樺」派文学の、主観主義ないし自我主義が生れたことには、多く疑いをさしはさむ余地はない。漱石の文学もまた、全体として主観的であり、主我的であった。だからこそ、客観主義ないし現実主義に立つた自然派の人々から、その作品をしばしば「拵へもの」と非難されなければならなかった。

直哉が漱石から朝日新聞への連載小説を依頼されたのは、大正二年の暮のことであった。大正二年は、直哉にとって多事であった。最初の短篇集「留女」の刊行が一月、七月に尾道から帰京したが、翌八月には山手線の電車にはねられて重傷を負った。その療養のための城崎行。秋、帰京して大森に寓居を定めた。その間、「清兵衛と瓢箪」「出来事」「范の犯罪」等、初期を代表する諸作が書かれた。漱石の依頼を受け、承諾したのはこの年の十二月のことであった。それはちやうど、「范の犯罪」を発表した直後であった。そして直哉は、翌三年七月、松江から上京して漱石を牛込の家に訪ね、

執筆を謝絶している。「時任謙作」は、ついにそのままの型で日の目を見ることが出来なかったのである。その前後の直哉における「実感」の相貌は、前記した二年の諸作、それに直哉の第一期の下限を画した三年四月の「児を盗む話」等に特に明瞭であった。今それを、「范の犯罪」に即して一瞥しておきたい。

妻にとつて同棲してゐる事は非常に苦痛でなければならぬと思ふのです。併し其苦痛を堪へ忍ぶ我慢強さは逆も男では考へられない程でした。妻は私の生活が段々壞されて行くのを残酷な眼つきで只見てゐました。私が自分を救はう——自分の本統の生活に入らうともがき苦しんでゐるのを、押し合ふやうな少しも隙を見せない心持で、しかも冷然と側から眺めてゐるのです。

ここにも「本統の生活」を求めても「がき苦しむ」人間がいる。「浮雲」の文三もそうであった。「行人」の一郎もそうであった。文三の苦悩に伴奏したものは、お勢の軽薄な笑いであった。一郎の苦悶を知らぬ顔で見ていたのは、「スピリット」のない妻お直であった。そして今、范の「もがき苦しむ」のを、その妻は冷然と眺めている。早産した妻、その児を自分の乳房で押し殺した妻、しかも、その児は夫の産ませた児ではない。范は知っている。彼は裁判官に向つて、「想像してゐます。それは妻の従兄です。」と答へる。後に

「暗夜行路」の主人公が、この范と全く同じ苦境に立たなければならなかったことを考え、一郎の苦悩がやはり妻への疑惑に由来したことを思えば、こういう重複が単なる偶然的結果であると考ええることは、むしろ不自然であろう。「范の犯罪」は先述した通り大正二年十月の「白樺」に発表されたが、その執筆されたのは同年九月二十四日である。それはちょうど、大正元年十二月六日から二年の四月七日まで続いていた、その連載中のことである。そして、苦悩する奇術師范の手によって投げられたナイフは、その妻の頸動脈を切断してしまう。事件は結果的には事故と裁断された。しかし范の心に殺人の意志がなかったわけではない。

その不快と苦しみで自分は今中毒しようとしてゐるのだ。中毒しきつた時は自分はもう死んで了ふのだ。生きながら死人になるのだ。自分はさういふ所に立つてゐるのに尚それを忍ぼうといふ努力をしてゐるのだ。そして一方で死んでくれればいい。そんなきいたないやな考を繰返してゐるのだ。其位なら、何故殺して了はないのだ。殺した結果がどうならうとそれは今の問題ではない。牢屋へ入れられるかも知れない。しかも牢屋の生活は今の生活よりどの位いいか知れはしない。其時は其時だ。其時に起ることは其時にどうにでも破つて了へばいいのだ。破つても、破つても、破り切れないかも知れない。然し死ぬまで破らうと

すればそれが俺の本統の生活といふものになるのだ。

ここに明らかなことは、同じく「死ぬか、気が違ふか」という窮地に立つた一郎と范ではあったが、その危機に対処する仕方において、二人の間にかんがりのへだたりの在ることである。一郎は、前述したように、「絶対の境地」を求めて旅に出た。それに対して范は、妻の頸に刃を投じた。その行動性、現実性・積極性において、范は明らかに一郎を乗り越えていた。一郎はあくまで知識人であった。范はむしろ行動人であった。そしてこのちがいは、そのまま、漱石その人と直哉自身とのちがいであった。直哉における漱石継承が、決して一直線のそれではなく、その過程に明確な一つの屈折を持つものであったことも、ここに考えられていいであろう。かつて二葉亭から漱石へのつながりにおいても、そこに一つの否定が内包されていた。事情はここでも同じであった。思うに、それが生命ある継承である場合は、継承とは常に否定的継承であると考えて誤りではないであろう。そういう直哉が、二葉亭にある親和の情を持っていたという事実は、興味深い。

此間、さう云ふ本が届いて、何気なく拾読みをして、二葉亭四迷の「犬」といふのを讀んだが、大変面白く思つた。「平凡」から抜いたもので三十年前新聞で一度見た事のあるものだが、読みつつ、何だか自分の物に似てゐるや

うに思ひ、試みに娘に読まし、どう思ふかと訊かうとしたら、娘は既に見てゐて、自分もさう思ひ、姉にそれを云つたところだといふ。二葉亭の文章にはしつかりした骨がある感じで、私は尊敬してゐるが、何しろ作品が少く、「浮雲」は多分見てゐず、「その面影」と「平凡」を、前者は二度、後者は一度読んだきりで、影響を受けたといふ意識は自分に全くないが、少くも「平凡」中の「犬」の条だけで云へば非常によく似てゐる——つまり私の書き方が二葉亭に似てゐるのを面白く思った。

これは「続創作余談」の一節である。ここで、直哉の「実感」表現の一例として、彼自身の「犬」の描写をみよう。

私は小犬が農家の納屋へ逃げ込んだ所を到頭つかまへた。小犬は夢中になつて、私の手に噛みつかうとした。私は上顎と下顎とを一緒に握つて、あいた手で縄を首環へ通した。それから犬の尻を五つ六つ平手で擲つてやつた。小犬は啼声もたてずに、食ひつかうともがいた。疳癪から此方も殺氣立った。二本に短くなつた縄でつる下げてやると、小犬は齒をむいたまま鮎のやうに空中で跳ねた。……私は運動のハンマーのやうに小犬を振り廻し、遠く田圃の中へはふり投げてやらうかと思つた位だった。……私は急激な運動と亢奮とで青い顔をしてゐた。

「雪の遠足」「婦女界」昭和四・一の一節である。二人の青年とともに「雪の遠足」に出かけた主人公が、その後をついて来る自分の家の小犬の態度に腹を立てたのである。

「早く来い」というと尾を下げたまま臆病にその先を振るが、近づけば逃げた。何者をも決して信じない小犬の態度はいくら小犬でも腹が立つて来た。」その結果が、右の活劇である。ここで言い得られることは、この時の主人公すなわち直哉が本当に怒っていることである。「いくら小犬でも腹が立つて来た」ということばを、ある余裕を持つて笑うことはできても、「鮎のやうに空中で跳ねる小犬」や疳癪から殺氣立つた主人公の「青い顔」に対しては、もう笑えない。そこには、まざまざと、憤怒の「実感」が立ちこめてゐるから。直哉にとつて、この時、小犬は敵であり、悪であつた。それは例えば「現代日本の開化」の浅薄さに憤怒する漱石、「人生に触れなきや不可」とうそぶく文学者連中に対する二葉亭の腹立ちと、何の相違もなかつた。むしろ、小犬の態度に青くなつて憤怒するところに、「白樺」派、ことに直哉における「実感」の純粹さが見られてよかつた。問題は、対象にはない。自分の「実感」そのものの燃え方にある。これは、漱石にも、二葉亭にも未だ期待できない態度であつたにちがいない。と同時に、そこに直哉の文学の閉鎖性も生じた。小犬の態度に殺氣立つた直哉には、その「実感」をそのままに、より根元的、したがつてより抽象的な問題に向けることは不可能に近かつた。

私は、二葉亭・漱石それから直哉と、「実感」の文学の糸をたどった。もちろんこの糸は、直哉で切れてしまったわけではない。しかし、直哉を乗り越えた作家は、容易に見出されないことも事実であった。大正文壇における直哉の位相の高さ、大正期に出発した作者たちの多くがその超絶の目標として直哉を仰いでいうことは、かくれもない事実である。直哉は「小説の神様」ですらあった。何故だったか。それは必ずしも、その精細なりアリズムの故ではなかったにちがいない。むしろ、直哉の文学が、まぎれもない「実感」の文学だったからではなかったか。そう考える時、はじめて、芥川竜之介を始めとして横光利一や武田麟太郎やの直哉傾倒の意味が明らかとなると同時に、何故直哉を越えることがそれほど困難であったかも了解されるであろう。手法の問題ではなく、それは正しく「実感」の問題だったのである。直哉を越す「実感」の人たることの困難さだったのである。

注記(1) 「それから」第五章中のことば。「ジエームスの云った通り、暗闇を検査する為に蠟燭を灯したり、独楽の運動を吟味する為に独楽を抑える様なもので……」なお漱石は「思ひ出す事など」の中で、ジエームスを悼む文を作っている。William James (一八四二〜一九一〇)のいわゆるプラグマティズムはわが自然主義評論にもしばしばその影を落しているけれども、それがどの程度のものであるか、影響と言い得られるものであったかどうかには、疑いの余地がある。

(2) 「くち葉集ひとかこめ」(明治二二)の末尾には、「浮雲」に関する幾通りかの構想が記されている。そのいくつかには、文三の末露の状が見える。ここに、十一月廿六日と日付のあるものを転記しておく。

第二十三回 大団円

- 一 老母より火難を知らせる事
- 一 老母の病氣並に金子調達たのみ手紙到着
- 一 孫兵衛帰宅に付その事相談に及ぶ事
- 一 貸し呉れたれどお政の「貧乏人を親類にもつものいいか是れかこわい」などいひたるを聞きて文三苦しむ事
- 一 お勢本田に嫁する趣に落胆失望し食料を払ひかねて叔母にいためられ遂に狂気となり瘋癲病院に入りしは翌年三月頃なりけり(傍点筆者)